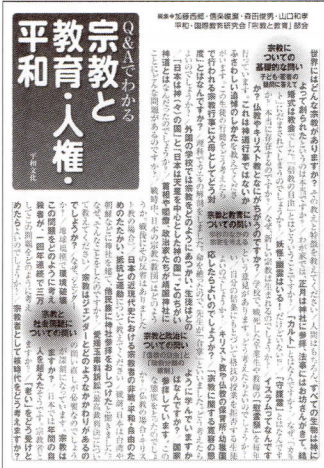


平和文化 2015年 本体 1800円+税
**Q&A でわかる
 宗教と教育・人権・平和**

評者 川崎 宏 編集委員



本著が出版されたのはちょうど戦後70年、2015年8月15日である。

編集委員会を代表して山口和孝氏は本書の趣旨を「戦争のために宗教が国家に利用されてきたことの問題をともに深く考え、二度と一人ひとりの心が時の権力者に利用されたりしないようにすることを願って」「現代の社会が抱えている宗教と教育・人権とのかかわり、あるいは、宗教と社会のあり方、宗教が向かいあわねばならない課題を一問一答形式で紹介する」としている。

質問は幽霊、守護霊、靖国神社参拝、イスラム教、カルト、自殺、ジェンダー、核時代などまさに多岐にわたるが、その答によって宗教とその全体像・現在の課題が明らかになってくる。高校生や大学生、教育に携わる人を対象にし、かつ一般教養書として書かれている好著である。

日本国憲法第20条には「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」とある。しかし、「宗教教育」

を行うことと「宗教を学習すること」は全く異なり、宗教の発生、教団の存在や宗教文化、宗教がもたらした戦争や社会的事件などは教えなければならない。生きている意味や人間関係のリアルな実感を求めて「自分探し」をしている若者に、自分と自然・社会との関係を理解できる基礎学力や教養を身につける機会を保障すべきと力説する。

また、戦争の準備として、軍備や兵士の訓練だけでなく「なにかおかしいぞ」という国民の素朴な疑問や意見を封じ込め、心のありようを抑圧する仕組み、そして戦死が「無駄死に」でなく「立派な」道徳的行為であることを納得させる精神回路の整備をあげている。「道徳の教科化」とも関わる問題である。

多くの宗教が愛国心を高揚させることに加担してきた。それはなぜどのように機能したのか、戦争法が強行採決された今、向き合って考えなければならない課題であり、真の意味で確かな学力と豊かな人格そして文明のありようを、改めて考えさせる契機となる本である。

編集後記

▽「学ぶ代償借金1000万」「働いているのに返せない」「請求が年金頼りの親に」「借金背負って新卒は嫌」東京新聞が「悲しき奨学金」と題してその実態を連載しました。返済できず、自己破産する事例、返還につけ込む風俗ネット求人もあると告発しています。

▽日本学生支援機構は3ヶ月以上の滞納者の個人情報をもとに「ブラックリスト」として登録、(2014年17279人)滞納を解消しても5年間は登録が消えず、住宅や自動車のローン審査が通りづらくなる恐れがあります。実態は「利息付きの教育ローン」であり、銀行や債権回収会社に利益をもたらす金融事業である「貧困ビジネス」になっています。▽「高い学費」「教育への公費支出の少なさ」「私費負担の高額化」国による給付型奨学金制度がないことが、本来平等に保障されるべき学習権を奪っています。批判を強め給付型奨学金制度をつくっていかねばなりません。(山内)